

S-II-2

伝統医学的病理概念への臨床免疫学的手法の応用

富山医科薬科大学医学部 和漢診療学講座¹⁾

砺波サンシャイン病院 和漢診療科²⁾

○小暮敏明¹⁾, 田原英一²⁾, 新沢 敦¹⁾, 萬谷直樹¹⁾, 酒井伸也¹⁾, 嶋田 豊¹⁾, 寺澤捷年¹⁾

【目的】漢方医学での診断や病理概念は、伝統医学的手法に基づいて構築されている。従って、いわゆる六病位概念や気血水理論を応用することが、臨床において漢方薬を選択する際の最も客観的な方法であると考えられる。しかしながら、伝統医学的手法は心身一如を前提とし、きわめて全人的な指標を中心としているが故に、西洋医学的な客観性、すなわち要素還元性に乏しいと指摘されている。一方、近年の臨床研究で補剤を中心とする漢方方剤はNK活性を増加させることが報告されている。そこで今回、preliminaryな研究として気血水の各病態と末梢血リンパ球のpopulationとの関連を検討したので報告する。

【対象と方法】(1) 臨床免疫学的検討を行う前に、基礎疾患による影響を取り除くため、西洋医学的に一定の免疫学的特徴を有する慢性関節リウマチ患者(26名、男性7名、女性19名)を対象とした。これらの患者の気虚、気逆、気鬱、血虚、水滯の各スコアを和漢問診表を用いて算出した。末梢血リンパ球のサブセットは、CD3, CD19, CD4, CD8, CD16, CD56, CD158a, CD158bの各mAbを用いてFlowcytometryによって2 colorで測定した。気血水の各スコアとリンパ球の各populationとの関連をスピアマンの順位相関を用いて検討した。(2) Longitudinal studyとして、虚弱高齢者5例を対象にして気虚・血虚スコアならびにリンパ球サブセットを補剤の治療のもとに3-6ヶ月間追跡調査した。

【結果】(1) 各スコアとCD4/CD8比には関連はみられなかった。また、CD3, CD19, CD3CD4, CD3CD8, CD16CD56などの細胞と気血水の各スコアとの有意な相関は得られなかった。NKcellとの関連はなかったが、NK細胞上のレセプターであるCD158b陽性細胞は、パーセント、細胞数ともに気虚スコアと負の相関を示した。(2) 追跡調査で、補剤の奏功した症例では、気虚スコアが改善するとともにCD16CD56, CD16CD158bなどの細胞が増加する傾向にあったが、血虚スコアには一定の傾向はみられなかった。

【考察・結論】気の異常の一つである気虚とCD16CD158b陽性細胞は負の関係にあった。すなわち活性化したNK細胞の減少は、気虚の病態を呈した患者の一つの特徴と考えられる。このような検討から気虚など複雑な要素が関与する病態の一部を客観化して同一症例での経過観察などに応用できる可能性が示唆された。